

学びのスイッチ

— 男女共同参画 A to Z —

このコーナーでは、男女共同参画に関する基本的な情報をお伝えします。

2020年度の「学びのスイッチ」は、暮らしや社会の中でふと疑問に思う言葉や事象を、ジェンダーの視点から考えていきます。今号では、「ミスコン」について社会学・ジェンダー論が専門の高橋幸さんに執筆いただきます。

日常の“モヤモヤ”を見直してみると

「ミスコン」—女性の商品化ではないの？

高橋 幸

批判を受けながらも存続してきたミスコン

ミスコンテスト（以下、「ミスコン」と表記）に対しては女性の中でも賛否両論、多様な意見があるのが現状です。

ミスコンはこの40年間批判され続けてきましたが、現在でもなお活況を呈しています。その大きな要因として、審査員の男女比を均等にしたり、ミスターコンテストを同時開催したりといった制度改革があります。近年では、TwitterやInstagramの登場によって、女性のミスコンファンが一定の厚みをもって存在していることもわかってきました。これまでミスコンと言えば、男性が女性をランクづけする場だというイメージが一般的でしたが、実は女性たちが自分の「理想の女性像」や「好みの女性像」を見つけ出し、彼女を応援しながら楽しむ場にもなっています。

しかし、このような現状を直視しようとする、なんだかモヤモヤした気持ちが湧いてきます。「『女性』は一枚岩ではない」ということは、特に1990年代以降のフェミニズムにおいて強調されてきたことであり、私も頭ではわかっていましたが、どうしても「ミスコンを支持する女性たちはなぜ女性を『商品化』するようなイベントを楽しめるのだろうか?」、「彼女たちは、まだ社会の男女不平等の実情を『知らないだけ』なのではないか?」などと考えてしまいます。ただ、立派な一人の女性

の考えを「無知」や「まだ知らないだけ」のような言葉で切り捨てることもしたくありません。

そこで、今回はこのモヤモヤについて考えてみます。まず、現代においてミスコンの何が問題なのかを確認し、その上で、女性たちのミスコン肯定的態度をどう捉えることができるのかを論じます。

ミスコンの問題性

ミスコンが抱えている問題点として、セクシズム（性区別主義、性差別）とルッキズム（外見至上主義）があります。一つ目のセクシズムとは、人間を「男性か女性か」の二分法で分け、それに基づいた性別規範や評価基準を課すことを指します。このような性別二元論は、女性の生きづらさや性的マイノリティ差別を存続させます。現在のミスコンは、性別二元論を維持するように働いている点で問題です。

二つ目のルッキズムとは、「外見の良さ」で人を判断することを指します。性別役割を基盤とする社会では、「男性を経済力で、女性を『外見の良さ』で」評価するという判断基準が浸透してきました。女性に求められてきた「外見の良さ」とは、純粋な美しさというよりも異性愛男性にとっての「性的対象としての望ましさ」を意味します。そのため、女性の外見について言及する場では、性的からかいか性的モノ化を伴う女性蔑視、セクハラが起こ

〈表1〉近年の大学ミスコンに関わる性暴力・セクハラ問題（一部抜粋）

2003年	早稲田大学のミスコンが中止（集団準強姦罪事件を起こした大学公認サークル「スーパーフリー」をパロディ化したイベントを行い、社会的批判が高まったため）
2009年	慶應義塾大学の広告学研究会の学生が公然わいせつ容疑で書類送検され、2010年のコンテストが中止
2016年	慶應義塾大学の広告学研究会の学生が集団準強姦事件で書類送検され、同年のコンテストが中止
2019年	慶應義塾大学のミスコン出場者が、主催団体メンバーによるセクハラを告発
2020年	東京大学のミスコン出場者が、主催団体メンバーによるセクハラを告発

出所) 筆者作成

りやすくなります。実際、2000年代以降の大学のミスコンではたびたび、主催団体によるセクハラ問題が起ってききました(表1)。

女性たちによるミスコン支持:「女らしさへの自由」の追求

ただし、社会的な批判の高まりを受けて、ミスコン運営側はミスコンの制度改革を積み重ねてきました。冒頭で挙げたものに加え、スピーチ部門の点数配分を増やすことでルッキズムを弱めようとしたり、出場者の性別規定を取り払ってセクシズムを弱めようとしたり、出場者に女性マネージャーをつけたりとさまざまな工夫をしています。

このようなミスコンの制度改革の実現は、フェミニズムによるミスコン批判の成果の一つであると私は考えています。ミスコンを「粉砕」することはできませんでしたが、実際に、現在のミスコンにおける女性の性的商品化の側面はかつてより抑制されています。

そして、このようなミスコン自体の変化を前提にして、女性のミスコンファンが増えています。ミスコンに出る女性たちが、既存の女性像を覆す新しい女性像の発信を、ミスコンという場を使って行いたいと語ることも多くなりました。ミスコンを支持する女性たちには「自分が望む女らしさ」の実現を求める態度が見られます。

「自分が望む女らしさ」を実現することは、必ずしも性別二元論の強化につながるとは限りませ

ん。真に自由なセクシュアリティ（「女らしさ」）の追求が個性的なものとなって性別二元論を攪乱する可能性があるからです。

また、誰かが「自分にとって望ましい女らしさ」を実現しようとする（女らしさへの自由の実現）が、必ずしも、他の女性に対して「本人が望まないような女らしさ」を押し付けること（女らしさからの自由の阻害）になるわけではありません。もしそのようなゼロサムゲームが「女らしさ」に関して成り立っているのだとすれば、そのような構造をこそ打破していくべきでしょう。

ミスコン否定論者も賛成論者も「女性の自由」を目指している点では共通しています。「女らしさからの自由」と「女らしさへの自由」の双方を実現していくことができるような社会のあり方を模索していくことが、これから私たちが目指していくべき方向であるように思われます。

ちょっと深ぼり

- 高橋幸『フェミニズムはもういらない、と彼女は言うけれど——ポストフェミニズムと「女らしさ」のゆくえ』(晃洋書房, 2020)
- ウェブサイト「現代ビジネス」内記事:「現代のミスコン/ミスターコンを、「ジェンダー論」の専門家はどう考えるか」(高橋幸, <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/74818>)

たかはしゆき: 1983年宮城県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。専門は社会学理論、ジェンダー理論。現在、日本女子大学学術研究員ならびに武蔵大学他非常勤講師。